

西千葉の地域SNSを運営 ● NPO法人TRYWARP

学生と商店街と住民との交流から生まれた SNSが強力な広報ツールに

千葉大学のある西千葉駅周辺の地域SNS「あみっぴい」が話題を呼んでいる。千葉大学の学生、地元商店街、そして住民が交流し、様々なイベントや取り組みが行われる。「あみっぴい」を運営するNPO法人TRYWARPの虎岩雅明代表理事に話を聞いた。

■地域の中で「こんにちは」を言えるきっかけづくり

地域SNSの成功事例としてマスコミなどでも取り上げられることが多い「あみっぴい」。もともとは千葉大学の学生が地域の人に教えるパソコン教室が始まりだった。「街の中で「こんにちは」を言えるきっかけづくりがしたかった」と話すのは、NPO法人TRYWARPの虎岩雅明代表理事。

千葉大学には地元の学生が一部ほどしかおらず、ほとんどが地方出身者。多くの同級生の姿に、「みんな地域のことを何も知らないで卒業してしまう」と寂しさを感じていた虎岩さんは、学生サークルTRYWARPを設立し、地域の人へのパソコン教室を始めることに。そのとき、相談に乗ってくれた

のが、千葉大学と通りを挟んで接するゆりの木商店街の会長だった。発足当初は商店街の店舗の空き時間を利用して、飲食店のテーブルなどでパソコンを教えたこともある。

その後、地域通貨「ーナッツ」が西千葉地域に導入され、千葉県の事業として商店街の各店舗に決済用のパソコンが設置された。その際、TRYWARPはIT決済システムを開発した。それから商店街のIT化の機運が高まり、ついには商店街の会長がイベントなどを知らせるブログを書き始めた。しかし、記事の下にコメントが付いていくブログでは、書き込みがだれの発言か分からず、情報を整理することが難しくなったため、会長は虎岩さんにポータルサイトのようなものを作れないかと相談した。

そのころ、虎岩さんはパソコン教室の生徒がせっかくなりに付けた使い方を忘れないように、日常的にパソコンを使い続けられる環境を整えたいと考えていた。そこで、その二つのニーズを合わせる形で誕生したのが、西千葉の地域SNS「あみっぴい」である。二

〇〇六年二月のことだった。

■まちあるきでのお店紹介などリアルな活動が盛りだくさん

「あみっぴい」の特徴を尋ねると、「出会い系ではなく出会った系。知らない人は入れません」と虎岩さん。オープンには四十人のメンバーでスタートし、「若者言葉禁止、顔写真・本名必須、リアルに存在しないコミュニティ作成禁止」を掲げた。

「パソコン教室の生徒さんには、定年後の高齢者もたくさんいます。そういう方々に話を聞くと、「自分のページにニックネームだけしか載せないのは理解できない」「顔写真がない人は信用できない」といった声が多く聞かれます。それで、高齢者にも気持ちよく使っていたために、原則として本名と顔写真登録をお願いしています。「あみっぴい」は、学生、商店街、地元住民の三者が交流するためのサイトです。若者だけに通じる言葉やネット用語なども使わないようお願いしています。また、サイト内のアイコンなども高

齢者に特化し、色や絵で機能が分かりやすいように気をつけています。左側から使ってもらいたい機能順に並べていて、慣れていくにつれ、右側にあるアイコンの機能へとステップアップしていく仕組みにしています」（虎岩代表理事）

また、地域SNSならではの取り組みとして、学生が西千葉のお店をまわって歩いて、地図付きのお店情報を掲載する「アイラブ西千葉」プロジェクトがある。発足当初の登録は七百五十店舗だったのが、二〇〇七年七月時点で九百八十八にまで増えている。

そのほかにも、千葉大学の構内で音楽イベントを開催したり、商店街の店舗が開発した化粧品イメージソングを作成したりと、日常的なつながりの中から、学生と商店街、住民が一緒になった活動が行われている。

「私たちはSNSで地域を盛り上げようとしているわけではありません。もともと交流があって盛り上がりつつあるものをより盛り上げるために、よりコミュニケーションできるように、SNSを使っているのです」（同）

■全国展開を始めた西千葉モデル

このような活動を通じて、西千葉の「あみっぴい」を運営するTRYWARPは次第に有名になっていった。虎岩さんは「SNSは地域内のコミュニケーションのために始めましたが、それによって外部への何よりの広報ツールになりました」と言う。

マスコミの取材やセミナーへの講演依頼などが頻繁にくるようになり、その中でほかの地域にも西千葉の「あ

みっぴい」と同様のシステムを使った地域SNSが広まり始めた。現在は千葉県東部の松戸地域と神奈川県東部の戸塚地域で導入され、秋田県でも検討が進んでいる。

「西千葉以外の地域に「あみっぴい」のシステムが広がっていったのは、まさしく「あみっぴい」のおかげです。私たちの知らない間に、いろいろなところで信頼をいただいたり、技術力を評価していただいたりしていました。今後このシステムを広げていきたいと思えます」（同）

しかし、虎岩さんは「SNSはあくまでリアルな交流がある地域で使うべきで、SNSで地域を盛り上げようとするのはナンセンス」と強調する。「SNSはあくまで道具であり、それ自体では何も起こりません。たとえば、友だちがいないのに携帯電話を買ったとしても、だれからも電話は掛かってきません。それと同じで、リアルで交流のない地域にSNSを導入しても、まったく盛り上がりません」と。

そこで、TRYWARPでは、ほかの地域の学生にパソコンの教え方を教えるなどして、西千葉と同じような状況を生み出そうと考えている。様々な地域でパソコン教室の採算がとれないといわれる中、学生を活用することで講師料を低賃金に抑えつつ、しかも学生にも仕事をする喜びを味わってもらおうのがねらいだ。

「せいと、四年間だけ西千葉に住んで、地域のことを知らずに卒業していくのがもったいないと思って、活動を始めました。私は第二の故郷をつくりたいと思ったのです。学生時代に地域の人との交流が生まれれば、卒業した後でも、「あのの人に会いたい」と西千葉を訪れるようになります。地域SNSをつながってあげれば、いつでも会いに来ることができます。そういうつながりをこれからもっと広げていきたいと思えます」（同）



学生、商店街、地元住民の三者の交流が西千葉「あみっぴい」の特徴。(上)学生や若者が講師を務めるパソコン教室の生徒には退職後の高齢者も多い。(下)学生が西千葉のお店をくまなく歩いて、地図付きのお店情報をSNSに掲載する「アイラブ西千葉」プロジェクトもユニークな取り組み。右は、NPO法人TRYWARPの虎岩雅明代表理事



●特定非営利活動法人TRYWARP <http://trywarp.com/>
●「あみっぴい」 <http://amippy.jp/>